

<資 料>

知的障害者用教科書・教材等の作成・活用に関する政策提言

—— 知的障害者用教科書・教材等に関するアンケート調査を通して ——

武富 博文*

本研究では、特別支援学校（知的障害）における文部科学省著作教科書の活用状況等について実態を明らかにするとともに、今後、知的障害教育分野における学習・指導の充実のためにどのような教材等が必要とされているかについて明らかにすることを目的に、特別支援学校現場の教員を対象としてアンケート調査を実施した。知的障害者用文部科学省著作教科書の学校現場における使用率は30%未満であり、十分に活用されているとは言い難い状況にあった。また、どのような工夫があれば教科書の活用が進むかについては、教科書や教科書解説をいつでも使えるような状態にすることや児童生徒の多様な実態と教育的ニーズを満たすバリエーションの豊かな教科書にすることなどが挙げられた。これらの調査結果を踏まえ、今後、新たに発行されることが推測される教科書の在り方やその活用を促すための方策、延いては知的障害教育全体の充実・発展に向けた教材等の作成・活用の在り方について、政策提言をおこなった。

キーワード：文部科学省著作教科書 Evidence-based Policy Making (EBPM) Private Finance Initiative (PFI) 政策提言

I. 問題と目的

平成29年4月に特別支援学校小学部・中学部学習指導要領が改訂され、小学部で完全実施となる令和2年度にあわせて特別支援学校小学部知的障害者用の文部科学省著作教科書（以下、星本）が改訂された。また、同様に中学部で完全実施となる令和3年度にあわせて特別支援学校中学部知的障害者用として星本が改訂された。

教科書は、教科書の発行に関する臨時措置法において「小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であって、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するものをいう。」と定められている。「準ずる学校」である特別支援学校（知的障害）においても、学校教育法第82条の規定（同第34条の準用規定）に基づき、今回の学習指導要領改訂の理念を反映させ、教育課程の構成に応じて組織排列された星本を使用する義務がある。しかしながら、星本は令和3年4月現在、特別支援学校（知的障害）小学部・中学部

用として国語、算数・数学、音楽の3教科のみしか発行されておらず、その他の教科については、学校教育法附則第9条の定めに基づき学校教育法第34条の第一項に規定する「教科用図書以外の教科用図書を使用することができる」こととなっており、この規定を踏まえた教科用図書を選択するケースが多くを占めることとなっている。

この点について「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告」（新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議, 2021）では、「国語、算数・数学、音楽以外の教科についても、各学校における指導の状況や学習者用デジタル教科書の在り方に係る検討の方向性に留意しつつ、著作教科書（知的障害者用）を作成することが必要である。」と提言されており、今後、星本の作成が進むものと推察される。しかしながら現在の星本の選択状況や使用状況を勘案せずに、単に教育インフラとしてあるべき姿のみを追求した星本の作成に終始してしまうと、知的障害教育の更なる充実を標榜した上述の提言に反して、星本の普及や実際の活用が進まず、その成果としての知的障害のある児童生徒の資質・能力の育成が十分に促進されない危惧を生じさせ、特別支援教育政策上の課題ともなりかねない。

星本の全国的な使用率は公表されておらず、先行研

* 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科

究における調査の実態も乏しい状況があるが、三浦(2006)は北海道内の特別支援学校(知的障害)の中で児童生徒一人当たりの星本や検定教科書、107条本(現在の学校教育法附則第9条に該当する一般図書)の採択数が多かった上位校2校(回答教員数=82名)を対象とした調査を実施し、星本をこれまでに使用したことがあると回答した者の割合が41.5%であったのに対して、現在、使用していると回答した者の割合が4.9%であることを報告している。地域的にも限定された状況の中で調査をおこなっているものの、星本が使用されない理由やどのような星本が学校現場で求められているかを明らかにしている点では、有益な示唆となると考えられる。

そこで本研究では、全国的な星本の活用状況や星本の活用促進に関するアイデア等について、地域的にも分散した状況の中でアンケート調査を実施し、現状及び課題を明らかにするとともに、実態を踏まえた政策提言をおこなうことを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

全国を北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の6ブロックに分類し、各ブロックから2校、合計12校の特別支援学校を抽出した。抽出の際、筆者がこれまでに直接、研修会や研究会等で関わりのあった学校、もしくは筆者が自治体レベルでの研究事業に参画したことのある自治体の中から事前に管理職に依頼し、承諾を得られた特別支援学校を対象とした。アンケート調査への回答は、当該学校の小学部・

中学部の全教員(非正規採用教員を含む)を対象とした(Table 1)。

2. 調査内容

アンケート項目は、「①刊行されている星本を手にとって見たことの有無、②刊行されている星本を使用した現在における指導の実施状況、③刊行されている星本を使用した過去における指導の実施状況、④刊行されている星本の教科書解説を手にとって見たことの有無、⑤刊行されている星本の教科書解説を参考にしたこれまでの指導の実施状況、⑥新たな教科の星本が刊行された場合の活用の可能性、⑦星本の活用促進に関するアイデア、⑧星本以外の教材等の活用の可能性、⑨知的障害教育の充実のための教科書・教材等のアイデア、⑩学部所属、⑪教職経験年数、⑫知的障害教育経験年数」の12項目で構成した。

基本的に⑥以外の項目は小学部・中学部のどちらにも所属していても共通の質問項目とした上で、⑥については、「新たな教科の星本」について、小学部では「生活、図画工作、体育」、中学部では「社会、理科、美術、保健体育、職業・家庭、英語」の各教科に分けて、星本の活用の可能性に関する質問項目を設定した。

また、回答は①～⑤までが選択肢(2択)による回答、⑥、⑧は5段階尺度による回答(なお、5段階尺度に加え「わからない」という選択肢を設定した)、⑦、⑨は自由記述、⑩～⑫は記述式の回答を求めた。

3. 調査期間および調査方法

調査は2021年8月6日付で依頼し、2021年9月10日を回答締切日として各特別支援学校宛に郵送によりア

Table 1 アンケート配布数及び回収数

地域	学校	小学部配布数	中学部配布数	小学部回収数	中学部回収数
北海道・東北	A校	12	13	12	13
	B校	60	28	58	22
関東	C校	34	25	32	23
	D校	69	34	52	28
中部	E校	66	30	37	21
	F校	29	16	29	16
近畿	G校	22	16	22	16
	H校	42	16	25	15
中国・四国	I校	37	25	37	25
	J校	7	7	7	7
九州・沖縄	K校	41	20	26	7
	L校	8	8	8	6
合計	12校	427	238	345	199

ンケート用紙を送付した。また、回収は、各特別支援学校単位で回答用紙の取りまとめをおこなった上で、郵送により回収した。

4. 分析方法

共通の質問項目については、所属学部を分析の軸とした学部間の比較をおこなうとともに、対象教科を分析の軸とした教科間の比較や教材等を分析の軸とした教材等間の比較をおこなった。なお、比較については統計処理ソフト SPSS Ver.28.0を用いて χ^2 検定および残差分析をおこなった。また、自由記述項目は、回答内容をセンテンスに分けてKJ法により分類した。

5. 倫理的配慮

事前にアンケート調査への協力について、対象となる特別支援学校の管理職に口頭で説明をおこなった上で了承を得た。また、回答者となる教員に対しては、書面により本アンケート調査の趣旨を説明するとともに①個人情報取扱いを厳正におこなうこと、②調査対象者個人を特定できるような情報公開をおこなわないこと、③調査への参加は任意で不参加の場合でも不利益が生じないことを説明し、回答への協力が可能な場合は同意書への自署を求めた。

Ⅲ. 結果および考察

アンケート調査の配布対象者総数は665名、回答者総数は544名となり、回収率は81.8%であった。回答結果は質問項目毎に無回答や選択肢「わからない」を選択したもの除外した上で集計・分析をおこなった。

最初にアンケート項目①～⑤までの集計結果および分析結果はTable 2の通りであった。

「①刊行されている星本を手にとって見たことの有無」については、小学部・中学部ともに教科によってばらつきはあるものの、80%前後が手に取って見たことがあると回答していた。なお、学部毎の教科間比較において、小学部では①星本を手にとって見たことの有無について0.1%水準で有意差が認められ($\chi^2(2)=24.909, p<0.001$)、残差分析の結果、国語や算数ではその比率が高くなっている一方で、音楽の星本を手にとって見た比率が低くなっている状況が伺えた。また、中学部でも同様に0.1%水準で有意差が認められ($\chi^2(2)=14.872, p<0.001$)、残差分析の結果、音楽の星本を手にとって見た比率が低くなっている状況が伺えた。教科毎の学部間比較において、特に有意差は認められな

かった。

「②刊行されている星本を使用した現在における指導の実施状況」について、小学部では15%～25%程度、中学部では24%～29%程度が現在、星本を使用して指導していると回答していた。なお、学部毎の教科間比較において、小学部では1%水準で有意差が認められた($\chi^2(2)=12.054, p=0.002$)。残差分析の結果、音楽では星本を使用して指導している比率が高くなっている一方で、算数ではその比率が低くなっている状況が伺えた。中学部では特に有意差は認められなかった。また、教科毎の学部間比較において、国語と算数・数学では1%水準で有意差が認められた(国語： $\chi^2(1)=7.274, p=0.007$)、(算数・数学： $\chi^2(1)=7.228, p=0.007$)。残差分析の結果、国語では小学部に比して中学部で星本を使用して指導している比率が高くなっており、算数・数学でも同様に中学部で星本を使用して指導している比率が高くなっていった。音楽については、特に有意差は認められなかった。

「③刊行されている星本を使用した過去における指導の実施状況」について、小学部では40%～45%程度、中学部では38%～52%程度が過去に、星本を使用して指導したことがあると回答していた。なお、学部毎の教科間比較において、中学部では5%水準で有意差が認められた($\chi^2(2)=8.649, p=0.013$)。残差分析の結果、国語ではこれまでに星本を使用して指導したことのある比率が高くなっている一方で、音楽ではその比率が低くなっている状況が伺えた。小学部では特に有意差は認められなかった。また、教科毎の学部間比較においても、特に有意差は認められなかった。

「④刊行されている星本の教科書解説を手にとって見たことの有無」について、小学部では35%～42%程度、中学部では18%～35%程度がこれまでに手に取って見たことがあると回答していた。なお、学部毎の教科間比較において、中学部では0.1%水準で有意差が認められ($\chi^2(2)=15.783, p<0.001$)、残差分析の結果、国語ではその比率が高くなっている一方で、音楽の教科書解説を手にとって見たことがある比率は低くなっている状況が伺えた。小学部では特に有意差は認められなかった。また、教科毎の学部間比較において、算数・数学と音楽ではそれぞれ5%水準、0.1%水準で有意差が認められた(算数・数学： $\chi^2(1)=3.841, p=0.05$)、(音楽： $\chi^2(1)=17.987, p<0.001$)。残差分析の結果、算数・数学では中学部に比して小学部で教科書解説を手にとって見たことのある比率が高くなっており、音楽でも同様に小学部で教科書解説を手にとって見たことの

Table 2 学部毎の教科間比較および教科毎の学部間比較結果

教科毎の 学部間比較	現在、基本を使用して 指導しているか否か				過去に基本を使用して 指導したことの有無				教科書解説を参考にして 指導したことの有無											
	基本を手にしたことの有無		指導していない		結果		合計		有る		無い		合計		結果					
	有る	無い	合計	度数	比率	調整済み残差	$\chi^2(1) =$	$p =$	有る	無い	合計	度数	比率	調整済み残差	$\chi^2(2) =$	$p =$				
国語	293	49	342	63	279	342	155	185	340	144	198	342	108	233	341					
	0.857	0.143	1.000	0.184	0.816	1.000	0.456	0.544	1.000	0.421	0.579	1.000	0.317	0.683	1.000					
	2.5	-2.5		-0.5	0.5		$\chi^2(2) =$			1.1	-1.1		$\chi^2(2) =$			0.4	-0.4			
				24.909,	50	292	342	12.054,	3.473	134	207	341	3.967,	105	236	341	0.155,	$\chi^2(2) =$		
小学部	0.857	0.143	1.000	0.146	0.854	1.000	$p < 0.002$	0.393	0.607	1.000	0.415	0.585	1.000	0.308	0.692	1.000	0.925,	$p = 0.925$		
	2.5	-2.5		-2.7	2.7			-1.0	1.0		0.9	-0.9		-0.1	0.1					
	2.49	93	342	85	255	340	**	135	205	340	n.s.	121	221	342	n.s.	103	237	340	n.s.	
	0.728	0.272	1.000	0.25	0.75	1.000	0.397	0.603	1.000	0.354	0.646	1.000	0.303	0.697	1.000					
音楽	-5.0	5.0		3.2	-3.2		-0.8	0.8		-2.0	2.0		-0.3	0.3						
	168	28	196	56	141	197	103	94	197	68	129	197	45	152	197					
	0.857	0.143	1.000	0.284	0.716	1.000	0.523	0.477	1.000	0.345	0.655	1.000	0.228	0.772	1.000					
	1.9	-1.9		1.0	-1.0		$\chi^2(2) =$			2.3	-2.3		$\chi^2(2) =$			1.8	-1.8		$\chi^2(2) =$	
中学部	168	28	196	47	150	197	1.098,	8.649	90	107	197	15.783,	42	155	197	8.585,	15.783,	42	155	197
	0.857	0.143	1.000	0.239	0.761	1.000	$p = 0.578$	0.457	0.543	1.000	0.33	0.67	1.000	$p < 0.001$	0.213	0.787	1.000	$p = 0.014$		
	1.9	-1.9		-0.8	0.8			0.2	-0.2		1.7	-1.7		**	1.1	-1.1		**		
	1.43	54	197	58	146	196	n.s.	74	123	197	**	36	162	198	**	24	173	197	**	
小学部	0.726	0.274	1.000	0.255	0.745	1.000	0.376	0.624	1.000	0.182	0.818	1.000	0.122	0.878	1.000					
	-3.9	3.9		-0.2	0.2		-2.6	2.6		-4.0	4.0		-2.9	2.9						
	293	49	342	63	279	342	155	185	340	144	198	342	108	233	341					
	0.857	0.143	1.000	0.184	0.816	1.000	$\chi^2(1) =$			0.421	0.579	1.000	$\chi^2(1) =$			0.317	0.683	1.000	$\chi^2(1) =$	
国語	0	0		-2.7	2.7		7.274,	2.240,	1.5	1.5		2.240,	3.016,	2.2	-2.2		4.783,	3.016,	2.2	-2.2
	168	28	196	56	141	197	$p = 0.007$	103	94	197	$p = 0.134$	68	129	197	$p = 0.082$	45	152	197	$p = 0.029$	
	0.857	0.143	1	n.s.	0.284	0.716	1.000	**	0.523	0.477	1.000	n.s.	0.345	0.655	1.000	n.s.	0.228	0.772	1.000	**
	2.5	-2.5		2.7	-2.7			1.5	-1.5		-1.7	1.7		-2.2	2.2					
小学部	293	49	342	50	292	342	134	207	341	142	200	342	105	236	341					
	0.857	0.143	1.000	0.146	0.854	1.000	$\chi^2(1) =$			0.393	0.607	1.000	$\chi^2(1) =$			0.308	0.692	1.000	$\chi^2(1) =$	
	0	0		-2.7	2.7		7.228,	2.098,	-1.4	1.4		2.098,	3.841,	2.4	-2.4		5.641,	3.841,	2.4	-2.4
	168	28	196	47	150	197	$p = 0.007$	90	107	197	$p = 0.148$	65	132	197	$p = 0.05$	42	155	197	$p = 0.018$	
中学部	0.857	0.143	1.000	0.239	0.761	1.000	**	0.457	0.543	1.000	n.s.	0.33	0.67	1.000	**	0.213	0.787	1.000	**	
	2.5	-2.5		2.7	-2.7			1.4	-1.4		-2.0	2.0		-2.4	2.4					
	2.49	93	342	85	255	340	n.s.	135	205	340	$\chi^2(1) =$	121	221	342	$\chi^2(1) =$	103	237	340	$\chi^2(1) =$	
	0.728	0.272	1.000	0.25	0.75	1.000	$\chi^2(1) =$			0.397	0.603	1.000	$\chi^2(1) =$			0.303	0.697	1.000	$\chi^2(1) =$	
小学部	0.1	-0.1		-0.1	0.1		0.017,	0.241,	0.5	-0.5		0.241,	17.987,	4.8	-4.8		22.659,	17.987,	4.8	-4.8
	1.43	54	197	50	146	196	$p = 0.896$	74	123	197	$p = 0.624$	36	162	198	$p < 0.001$	24	173	197	$p < 0.001$	
	0.726	0.274	1.000	0.255	0.745	1.000	n.s.	0.376	0.624	1.000	n.s.	0.182	0.818	1.000	**	0.122	0.878	1.000	**	
	-0.1	0.1		0.1	-0.1			-0.5	0.5		-4.2	4.2		-4.8	4.8					

** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$, **** $p < 0.001$

ある比率が高くなっていた。国語については、特に有意差は認められなかった。

「⑤刊行されている星本の教科書解説を参考にしたこれまでの指導の実施状況」について、小学部では30%程度、中学部では12%～23%程度が教科書解説を参考にして指導したことがあると回答していた。なお、学部毎の教科書間比較において、中学部では5%水準で有意差が認められた ($\chi^2(2)=8.585, p=0.014$)。残差分析の結果、音楽では教科書解説を参考にして指導したことがある比率が低くなっている状況が伺えた。小学部では特に有意差は認められなかった。また、教科書毎の学部間比較において、国語、算数・数学では5%水準、音楽では0.1%水準で有意差が認められ

た (国語： $\chi^2(1)=4.783, p=0.029$)、(算数・数学： $\chi^2(1)=5.641, p=0.018$)、(音楽： $\chi^2(1)=22.659, p<0.001$)。残差分析の結果、国語、算数・数学、音楽ともに、中学部に比して小学部で教科書解説を参考にして指導している比率が高くなっていた。

次にアンケート項目⑥「新たな教科書の星本が刊行された場合の活用の可能性」の集計結果および分析結果は Table 3-1 (小学部)、Table 3-2 (中学部) の通りであった。なお、得点化平均については、必ず活用する = 5 点、まあまあ活用する = 4 点、活用したり活用しなかったり = 3 点、あまり活用しない = 2 点、全く活用しない = 1 点と換算して教科書毎に得点を平均して求めた数値であり、同様に標準偏差も求めた。

Table 3-1 新しい教科書と新しい教科書の活用度合のクロス表 (小学部)

	必ず活用する	まあまあ活用する	活用したり活用しなかったりする	あまり活用しない	全く活用しない	合計	平均・標準偏差	結果
生活	度数	59	114	112	19	6	310	3.65
	比率	19.0%	36.8%	36.1%	6.1%	1.9%	100.0%	
	調整済み残差	-1.2	-0.1	1.7	-0.8	-0.3	0.92	
図画工作	度数	80	117	92	20	5	314	3.79
	比率	25.5%	37.3%	29.3%	6.4%	1.6%	100.0%	
	調整済み残差	2.2	0.1	-1.5	-0.6	-0.8	0.95	
体育	度数	60	114	99	27	9	309	3.61
	比率	19.4%	36.9%	32.0%	8.7%	2.9%	100.0%	
	調整済み残差	-1.0	-0.0	-0.2	1.4	1.1	0.99	

$\chi^2(8) = 9.290, p = 0.318$
n.s

Table 3-2 新しい教科書と新しい教科書の活用度合のクロス表 (中学部)

	必ず活用する	まあまあ活用する	活用したり活用しなかったりする	あまり活用しない	全く活用しない	合計	平均・標準偏差	結果
社会	度数	34	50	72	9	5	170	3.58
	比率	20.0%	29.4%	42.4%	5.3%	2.9%	100.0%	
	調整済み残差	-0.7	-0.4	1.3	-0.6	-0.2	0.97	
理科	度数	31	53	71	9	5	169	3.57
	比率	18.3%	31.4%	42.0%	5.3%	3.0%	100.0%	
	調整済み残差	-1.3	0.2	1.2	-0.6	-0.2	0.95	
美術	度数	43	56	60	9	6	174	3.70
	比率	24.7%	32.2%	34.5%	5.2%	3.4%	100.0%	
	調整済み残差	0.9	0.5	-1.0	-0.7	0.2	1.01	
保健体育	度数	37	54	64	14	5	174	3.60
	比率	21.3%	31.0%	36.8%	8.0%	2.9%	100.0%	
	調整済み残差	-0.3	0.1	-0.3	1.1	-0.3	1.00	
職業・家庭	度数	45	59	66	7	5	182	3.73
	比率	24.7%	32.4%	36.3%	3.8%	2.7%	100.0%	
	調整済み残差	1.0	0.6	-0.5	-1.5	-0.4	0.97	
英語	度数	38	45	60	17	7	167	3.54
	比率	22.8%	26.9%	35.9%	10.2%	4.2%	100.0%	
	調整済み残差	0.3	-1.1	-0.6	2.3	0.8	1.08	

$\chi^2(20) = 14.611, p = 0.798$
n.s

小学部では、3教科ともに「まあまあ活用する」と回答した比率が最も高く、37%前後となっていた。得点化平均では3.61～3.79の値の範囲にあり、図画工作でやや高い値になっていたものの χ^2 検定による教科間の比較では、特に有意差は認められなかった。中学部では、6教科ともに「活用したり活用しなかったりする」と回答した比率が最も高く、教科によってばらつきはあるものの35%～42%程度となっていた。得点化平均では3.54～3.73の値の範囲にあり、職業・家庭でやや高い値になっていたものの χ^2 検定による教科間の比較では、特に有意差は認められなかった。

続いてアンケート項目⑧「星本以外の教材等の活用の可能性」の集計結果および分析結果は Table 4 および Table 5 の通りであった。なお、星本以外の教材等については、「指導者用デジタル教科書」、「学習者用デジタル教科書」、「各教科の教科書解説」、「指導の手引き・事例集」、「学習指導案集」の5種類について尋

ねた。

各教材等の活用度合に関する回答は、小学部における「学習者用デジタル教科書」の回答を除いて全ての教材等で「まあまあ活用する」と回答した比率が最も高くなっており、教材等によってばらつきはあるもののその比率は34.4%～44.0%の範囲となっていた。小学部における「学習者用デジタル教科書」の活用度合については「活用したり活用しなかったりする」との回答比率が最も高くなっており、その比率は42.5%であった。

学部毎の教材等間の比較 (Table 4) では、小学部において0.1%水準の有意差が認められた ($\chi^2(16) = 72.811, p < 0.001$)。残差分析の結果、「必ず活用する」と回答した比率は、「指導の手引き・事例集」と「学習指導案集」で顕著に高くなっており、一方で、「指導者用デジタル教科書」と「学習者用デジタル教科書」では顕著に低くなっている状況等が伺えた。なお、ア

Table 4 学部毎の教材等間の活用度合の比較結果

		必ず活用する	まあまあ活用する	活用したり 活用しなかったりする	あまり活用しない	全く活用しない	合計	平均・ 標準偏差	結果		
小学部	指導者用 デジタル教科書	度数	51	121	111	24	4	311	3.61 0.89	$\chi^2(16) =$ 72.811, $p < 0.001$	
		比率	16.4%	38.9%	35.7%	7.7%	1.3%	100.0%			
		調整済み残差	-3.4	0.6	1.5	1.5	1.1				
	学習者用 デジタル教科書	度数	49	99	134	30	3	315	3.51 0.90		
		比率	15.6%	31.4%	42.5%	9.5%	1.0%	100.0%			
		調整済み残差	-3.8	-2.5	4.4	3.0	0.3				
	各教科の 教科書解説	度数	86	115	101	20	3	325	3.80 0.93		
		比率	26.5%	35.4%	31.1%	6.2%	0.9%	100.0%			
		調整済み残差	1.3	-0.9	-0.4	0.2	0.3				
	指導の手引き・ 事例集	度数	103	137	79	9	2	330	4.00 0.93		***
		比率	31.2%	41.5%	23.9%	2.7%	0.6%	100.0%			
		調整済み残差	3.6	1.7	-3.5	-2.8	-0.5				
学習指導案集	度数	94	132	92	13	1	332	3.92 0.86			
	比率	28.3%	39.8%	27.7%	3.9%	0.3%	100.0%				
	調整済み残差	2.2	1.0	-1.9	-1.8	-1.2					
学部毎の 教材等間差	指導者用 デジタル教科書	度数	36	79	59	7	1	182	3.78 0.83	$\chi^2(16) =$ 21.612, $p = 0.156$	
		比率	19.8%	43.4%	32.4%	3.8%	0.5%	100.0%			
		調整済み残差	-2.2	1.3	0.5	0.2	0.6				
	学習者用 デジタル教科書	度数	36	80	59	7	0	182	3.80 0.80		
		比率	19.8%	44.0%	32.4%	3.8%	0.0%	100.0%			
		調整済み残差	-2.2	1.5	0.5	0.2	-0.9				
	各教科の 教科書解説	度数	45	70	62	6	1	184	3.83 0.86		
		比率	24.5%	38.0%	33.7%	3.3%	0.5%	100.0%			
		調整済み残差	-0.6	-0.3	0.9	-0.3	0.6				
	指導の手引き・ 事例集	度数	67	65	52	5	0	189	4.03 0.86		n.s
		比率	35.4%	34.4%	27.5%	2.6%	0.0%	100.0%			
		調整済み残差	3.3	-1.5	-1.1	-0.8	-0.9				
学習指導案集	度数	57	67	54	8	1	187	3.91 0.90			
	比率	30.5%	35.8%	28.9%	4.3%	0.5%	100.0%				
	調整済み残差	1.5	-1.0	-0.7	0.6	0.6					

※ $p < .05$, *** $p < .01$, **** $p < .001$

ンケート項目⑥と同様に得点化平均を求めたところ「指導者用デジタル教科書 =3.61」、「学習者用デジタル教科書 =3.51」、「各教科の教科書解説 =3.80」、「指導の手引き・事例集 =4.00」、「学習指導案集 =3.92」となっていた。中学部では特に有意差は認められなかった。

教材等毎の学部間比較 (Table 5) では「学習者用デジタル教科書」において 1%水準の有意差が認められた ($\chi^2(4)=16.002, p=0.003$)。残差分析の結果、「まあまあ活用する」と回答した比率は、中学部で顕著に高くなっており、小学部では顕著に低くなっている状況が伺えた。また、「活用したり活用しなかったりする」や「あまり活用しない」と回答した比率は、小学部で顕著に高く、中学部で顕著に低くなっていた。小学部における「学習者用デジタル教科書」の得点化平均は 3.51、中学部における得点化平均は 3.80であった。そ

他の教材等については、小学部と中学部の間において特に有意差は認められなかった。

次にアンケート項目⑦「どのような工夫があればより一層、星本が活用されると考えられるか (自由記述)」について、KJ法により分類をおこなった。なお、分類の際には意見の趣旨が一致していることはもとより、可能な限りキーワードが一致していることを原則的な分類のルールとした。回答者数は307件であったが、記述された意見について、ひとつの意味を成すセンテンスによって回答のラベル化を図ったところ、ラベルの総数は422件となった。これらを小分類・中分類・大分類の3段階を経て集約したところ、それぞれ59件、24件、9件の分類となった。最終的な分類を Fig. 1 に示す。

大分類の表札は「星本や教科書解説をいつでも使えるような状態にすること」、「デジタル化により教材の

Table 5 教材等毎の学部間の活用度合の比較結果

		必ず活用する	まあまあ活用する	活用したり 活用しなかったりする	あまり活用しない	全く活用しない	合計	平均・ 標準偏差	結果	
指導者用 デジタル教科書	小学部	度数 51	121	111	24	4	311	3.61 0.89	$\chi^2(4) = 5.024,$ $p = 0.285$	
	比率	16.4%	38.9%	35.7%	7.7%	1.3%	100.0%			
	調整済み残差	-1.0	-1.0	0.7	1.7	0.8				
	中学部	度数 36	79	59	7	1	182	3.78 0.83		
	比率	19.8%	43.4%	32.4%	3.8%	0.5%	100.0%			
	調整済み残差	1.0	1.0	-0.7	-1.7	-0.8				
学習者用 デジタル教科書	小学部	度数 49	99	134	30	3	315	3.51 0.90	$\chi^2(4) = 16.002,$ $p = 0.003$	
	比率	15.6%	31.4%	42.5%	9.5%	1.0%	100.0%			
	調整済み残差	-1.2	-2.8	2.2	2.3	1.3				
	中学部	度数 36	80	59	7	0	182	3.80 0.80		
	比率	19.8%	44.0%	32.4%	3.8%	0.0%	100.0%			
	調整済み残差	1.2	2.8	-2.2	-2.3	-1.3				
教材等毎の 学部間差	各教科の 教科書解説	小学部	度数 86	115	101	20	3	325	3.80 0.93	$\chi^2(4) = 2.804,$ $p = 0.591$
	比率	26.5%	35.4%	31.1%	6.2%	0.9%	100.0%			
	調整済み残差	0.5	-0.6	-0.6	1.4	0.5				
	中学部	度数 45	70	62	6	1	184	3.83 0.86		
	比率	24.5%	38.0%	33.7%	3.3%	0.5%	100.0%			
	調整済み残差	-0.5	0.6	0.6	-1.4	-0.5				
指導の手引き・ 事例集	小学部	度数 103	137	79	9	2	330	4.00 0.93	$\chi^2(4) = 3.982,$ $p = 0.408$	
	比率	31.2%	41.5%	23.9%	2.7%	0.6%	100.0%			
	調整済み残差	-1.0	1.6	-0.9	0.1	1.1				
	中学部	度数 67	65	52	5	0	189	4.03 0.86		
	比率	35.4%	34.4%	27.5%	2.6%	0.0%	100.0%			
	調整済み残差	1.0	-1.6	0.9	-0.1	-1.1				
学習指導案集	小学部	度数 94	132	92	13	1	332	3.92 0.86	$\chi^2(4) = 0.941,$ $p = 0.919$	
	比率	28.3%	39.8%	27.7%	3.9%	0.3%	100.0%			
	調整済み残差	-0.5	0.9	-0.3	-0.2	-0.4				
	中学部	度数 57	67	54	8	1	187	3.91 0.90		
	比率	30.5%	35.8%	28.9%	4.3%	0.5%	100.0%			
	調整済み残差	0.5	-0.9	0.3	0.2	0.4				

※ $p < .05$, ※※ $p < .01$

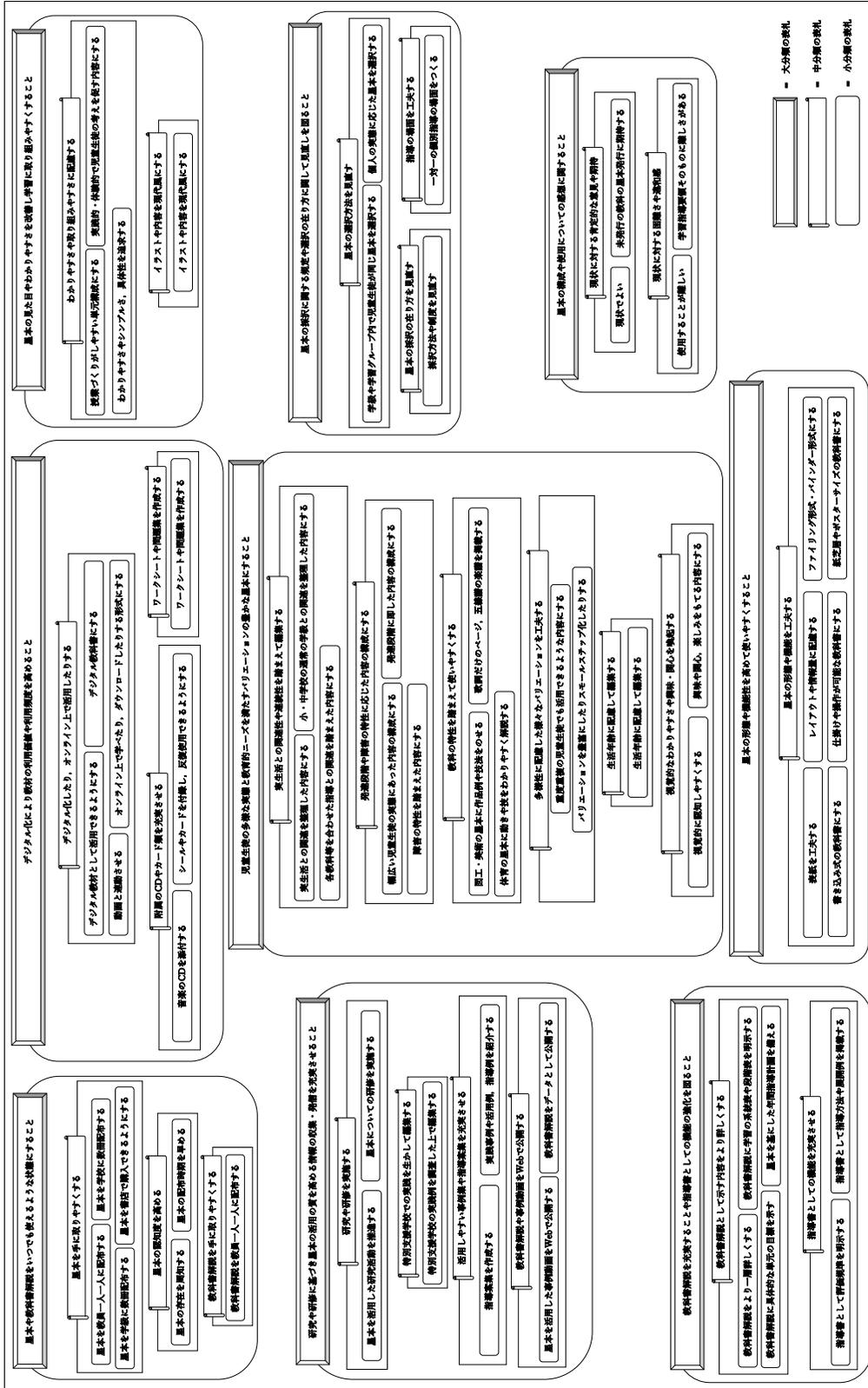


Fig. 1 星本の活用促進に関する工夫

利用価値や利用頻度を高めること」、「星本の見た目やわかりやすさを改善し学習に取り組みやすくすること」、「研究や研修に基づき星本の活用の質を高める情報の収集・発信を充実させること」、「児童生徒の多様な実態と教育的ニーズを満たすバリエーションの豊かな星本にすること」、「星本の採択に関する規定や選択の在り方に関して見直しを図ること」、「教科書解説を充実することや指導書としての機能の強化を図ること」、「星本の形態や機能性を高めて使いやすくすること」、「星本の構成や使用についての感想に関すること」となった。最後の表札である「星本の構成や使用についての感想に関すること」については、活用の促進に関する創造的な意見というよりも感想を述べるにとどまっていた点で、これを除外すると実質的には8件の意見に集約することができた。星本の活用促進に関する工夫と表裏一体の関係で述べられていた「星本の活用が促進されないことの理由」として、教師が児童生徒の実態とかけ離れているといった直感的な印象を抱いている実態や星本が現代的なイラスト等の内容構成になっていないとの指摘も数多く寄せられており、学習指導要領の改訂に伴う星本の改訂に際しては、考慮すべき意見であると考えられた。

次にアンケート項目⑨「どのような教科書や教材、資料等があれば活用が図られ、学習・指導が充実すると考えるか(自由記述)」について、アンケート項目⑦の方法と同様にKJ法により分類をおこなった。回答者数は234件であり、意味を成すセンテンスによって回答のラベル化を図ったところ、ラベルの総数は333件となった。これらを小分類・中分類・大分類の3段階を経て集約したところ、それぞれ60件、29件、10件の分類となった。最終的な分類をFig. 2に示す。

大分類の表札は「現在の教育課程上の教科等に関わる実用的な教材をより一層充実させること」、「教科書や教材の改善・充実・活用を促進する仕組みや制度を充実させること」、「教科書や教材を多様な質の観点から充実させること」、「実物のアナログ教材を充実させること」、「教科書に付属する各種のプリント教材を充実させること」、「教育環境や予算を充実させること」、「デジタル化に対応した教科書・教材・ソフトウェアを充実させること」、「学習・指導の参考となる解説書・指導書・手引き・プログラム類を充実させること」、「視覚的な効果を高める教材を充実させること」、「一般的な感想」となった。最後の表札である「一般的な感想」については、学習・指導の充実に関する創造的な意見というよりも感想を述べるにとどまってい

た点で、これを除外すると実質的には9件の意見に集約することができた。星本の活用促進に関する工夫と類似する観点で述べられていた意見が多くを占めている一方で、特徴的な意見として、教科書の内容に関連する実物のアナログ教材を充実させること、デジタル化に対応したソフトウェアを充実させること、更には教育環境や予算を充実させることといった意見が挙げられていた。

IV. 総合考察及び政策提言

アンケート調査の結果を概括すると、星本を手にしたことのある教員の比率は80%前後であるものの、実際に星本を使用して指導している比率は30%未満となっていた。また、これまでに星本を使用して指導した過去の経験を含めても、その比率は50%未満となっていた。小学部では音楽の星本使用比率が高くなって一方で、算数では低く、国語と算数・数学については、中学部での使用比率が高くなっていった。これらの状況から認知的な発達の高まりとともに星本が使用される可能性が推察された。この点は、知的に重度の障害のある児童生徒や重複障害を有する児童生徒でも活用できるような星本を望む意見や、内容をスモールステップ化するなど、バリエーションを豊富にして、より一層の内容の充実を望む意見がみられる状況とも符合していた。一方で、教科書解説を参考にした指導については、各教科共に小学部でその比率が高くなっており、30%程度となっていた。中学部では20%程度と顕著に低い値を示しており、十分に参考とされていない状況が明らかとなった。これらの点に関連して、アンケート項目⑧で「星本以外の教材等の活用の可能性」について尋ねた結果、小学部では「指導の手引きや事例集」、「学習指導案集」を「必ず活用する」ことについて顕著に高い回答比率がみられた。また、中学部においても有意差は認められないながらも「指導の手引きや事例集」を活用することについて、高い得点化平均の値を示していた。これらの点から教科書解説以外に「指導の手引きや事例集」、「学習指導案集」等のより詳細で具体的な参考資料を必要としている状況が伺えた。この点は、アンケート項目⑦「星本の活用促進に関するアイデア」やアンケート項目⑨「知的障害教育の充実のための教科書・教材等のアイデア」の自由記述の中に「指導書としての機能を強化すること」や「指導実践事例を充実させること」を望む意見がみられる状況とも一致していた。

以上の状況を踏まえ、今後望まれる星本の活用促進を含めた知的障害教育のより一層の充実のための政策について提言したい。

令和3年度現在発行されている星本の使用率が30%未満であることを勘案すると、新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議の提案を踏まえて、現在発行している教科以外の星本が作成される可能性が考えられるものの、その使用率が著しく伸びるとは考えにくい。この点については本調査からも明らかになったように、学校現場からのニーズを踏まえて、星本と関連付けられたより詳しい指導書や手引き、実践事例集、指導案集等の情報を充実することや学校教育法附則第9条における特別支援学校（知的障害）の位置付けについて慎重に検討すること等をおこなうことによって使用率を向上させることも考えられる。そのために、例えば事業予算として星本の活用促進に向けた研究事業を実施することや活用の成果を踏まえた研修会を開催すること、星本や解説書等の関連情報の周知・徹底等に関わる広報費用を充実することを含めた予算編成の実施とその成立・執行が望まれる。知的障害教育分野における「指導の手引き」に関しては、各教科等をあわせた指導の形態ごとに作成された「日常生活の指導の手引（改訂版）」（慶應義塾大学出版会、平成6年）以来、刊行されていない。学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた主たる教材である星本を単に作成するだけに留めることなく、これを基にした教育実践を普及・充実させる手立てとしても、指導の手引きの刊行等が望まれるところである。

なお、我が国では、あらゆる分野の政策課題の解決に向けて Evidence-based Policy Making (EBPM: 「証拠に基づく政策立案」) の推進を強化する動きがみられるが、一例を挙げればアウトプット評価につながる自治体における研修会開催回数等のアウトプット指標の測定、アウトカム評価につながる星本使用率等の継続的なアウトカム指標の測定、インパクト評価につながる観点別評価等を踏まえた知的障害のある児童生徒の資質・能力の育成状況の評価等、インパクト指標の測定等、当該分野においてもロジック・モデルを明確に構築した上で施策を展開することが望まれる。また、現在までに、学習指導要領の改訂ごとに文部科学省著作として星本の作成をおこなってきているが、作成に

係る予算や人員・期間等が限定された状況の中で調整・進行されてきたものと推察される。この点については、民間企業が有する高い専門性を効果的に活用すべく、検定教科書としての発行を視野に入れることや、その際、企業の採算面に係る税制優遇措置等の検討をおこなうことなど、指導の手引きの刊行も含め、PFI (Private Finance Initiative) の視点から民間の活力を生かしていくことも考えられよう。

いずれにしても、我が国において星本の発行や使用をめぐる議論がどのように進展してきたのかを十分に考慮しつつ、現在の学校現場において、教員や児童生徒がどのようなニーズを有しているのかという点にも耳を傾け、児童生徒の豊かな学びと学校生活・家庭生活・社会生活の充実に向けて、より一層の教育環境の整備につながるような教科書・教材等を普及させていくことが重要である。

文 献

- 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 (2021) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告.
- 三浦道弘 (2006) 文部科学省著作教科書(養護学校用) 及び学校教育法第107条に規定する教科用図書に関する研究. 北海道大学公教育システム研究, 5, 45-116.
- 文部科学省 (2021) 出版物の紹介 <https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html> (2021年11月22日閲覧).
- 内閣府 (2021) 内閣府における EBPM への取組. 内閣府, 2021年4月, <https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html> (2021年11月22日閲覧).
- 内閣府 (2021) PPP/PFIとは. https://www8.cao.go.jp/pfi/pfi_jouhou/aboutpfi/aboutpfi_index.html (2021年11月22日閲覧).
- 内閣府本府 EBPM 推進チーム (2021) 令和3年度内閣府本府における EBPM の取組方針.
- 太田正己 (2005) 知的障害教育における教材の史的研究—文部省著作教科書の編集・刊行をめぐる—, 発達障害研究, 27(4) 298-306.

(2022. 2. 10受理)

Policy Recommendations for the Preparation and Use of Textbooks and Teaching Materials for Children with Intellectual Disabilities: Through a Questionnaire Survey on Textbooks and Teaching Materials for Children with Intellectual Disabilities

Hirofumi TAKEDOMI

Department of Child Education, Faculty of Developmental Education, Kobe Shinwa Women's University

The purpose of this study was to clarify the actual situation of the use of textbooks copyrighted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in special-needs schools (intellectual disabilities). In addition, we clarified what kind of teaching materials are needed to improve the learning guidance in the field of education for intellectual disabilities in the future. The questionnaire was administered to the teachers in the field of special needs schools. The results showed that less than 30% of the textbooks copyrighted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology for Children with Intellectual Disabilities were used in the schools. It was difficult to say that the textbooks were being used sufficiently. When asked what kind of innovations would promote the use of the textbooks, the respondents answered that the textbooks should be ready for use at any time, and that the textbooks should be rich in variations to meet the diverse realities and educational needs of the students. Based on the results of these surveys, I made policy proposals on the state of textbooks that are expected to be newly issued in the future and measures to promote their use.

Key words: Textbooks copyrighted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Evidence-based Policy Making (EBPM), Private Finance Initiative (PFI), policy recommendations